【論文】

仏像にみるタイ上座仏教の現在

Religious Practices of Lay Theravada Buddhist in Contemporary Thailand as Seen from the Buddha Images

小川 絵美子†

1. はじめに

本稿はタイの一般社会における仏教の信仰の現在を、「仏像」を緒に 2 つの事例から読み解いていくものである。タイは仏教国といわれ、国民の 90%以上が上座部仏教を信仰している。現在、タイで信仰されている仏教は、インドからスリランカを経て伝えられた上座仏教、もしくはテーラヴァーダ仏教（Theravada Buddhism）と呼ばれるもので、日本に伝わった大乗仏教と比較し、戒律と出家を重んじる初期仏教の姿により近いとされる。仏教はタイにおいて教養や社会制度として受け入れられていると同時に、仏教徒と自称する多くのタイの人びとの日常生活、慣習の根底にあり、その世界観を成すものである。一方、人々の生活世界では、仏教伝来以前からの土着のアニミズムの信仰［Tambiah 1970］、ヒンドゥ的要素、天体の位置や動きを人や社会と結びつける占星術も存在感を持っており［小川 2014］、さらに中国系移民によってもたらされた中国廟の参詣も仏教的行為ととらえられるなど［片岡 2014］、その信仰実践は一枚岩ではない。

石井［1991］はタイの仏教を「信仰体系の二重性」という構図で説明している。苦からの救済、自らの解脱だけを求め、この世の一切を捨て去って修行に専念する出家者は、その日々の糧を在家者からの喜捨に依存している。一方、輪廻転生のなかでのより良い生を目指す在家者は、出家者の集団であるサンガを福徳を生み出す田地、福田とし、布施をすることによって功徳を積み、来世や未来に果報を得ようとする。タイの上座仏教とは、この「出家者の仏教」と「在家者の仏教」の併存によって成り立っているのである。

本稿が扱うのは、石井が「在家者の仏教」としたタイの一般大衆の信仰である。在家者である多くのタイの人々にとって、仏教は道徳や教養として知っていくものである。正統的教理に導かれたり、経典を研究することによってではなく、社会の一員であるなかで「仏教徒」であることを自称するにいたる。時に「出家者の仏教」とは異なる解釈がなされたり、精霊信仰を始めとした非仏教的な要素とも混淆していくものであり、その信仰実践は、広義の仏教という枠組みのなかに、多様な宗教的要素が重層的に存在している状態ともいえる。

今日的な状況をうつすものとして、仏像に絡むふたつの事例をとりあげる。ひとつは、ある大学生が描いた絵画における仏像の扱いが論争となり、社会的な問題にまで発展したという騒動。いまひとつは、新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的流行をきっかけとし注目されるようになったある仏像にまつわる話題である。これらの事例から、多くのタイ一般の人々、在家者によって今日信仰されているタイ上座仏教のあり方について

† 日本学術振興会 特別研究員（RPD） emiko_ogawa_0511@yahoo.co.jp

考察していく。

2. 「仏像」とはなにか

タイでは時代や地域により、それぞれ異なる特色をもつ仏像が作られ、守られてきた。今日でも、各地の像に参拝者が訪れているだけでなく、新たな像がつくられ続けて、人々の信仰の対象となっている。造仏は在家の仏教徒である多くの人々にとって大きな功徳行為であり、寄進を募っての大仏建立は現在に至っても一般的である。例をあげれば、現在タイ国内最大とされる高さ 93 メートルの坐像は、アーントーン県の寺院ワット・ムアン(Wat Muang)のもので、1991 年から 16 年の歳月をかけて 2007 年に完成されたものである。また、バンコクの寺院、ワット・パクナム・パシーチャルン(Wat Paknam Phasi Charoen)でも、新たに高さ 69 メートルの巨大像を建設中で、大仏といえば歴史的建造物と認識される日本と異なり、タイにおいては巨大仏像は今日でも厚い信仰を集めている。

「仏像」という用語を用いたが、厳密には本稿で扱う事例はいずれもタイ語で「プラプッタ・ループ(phra phuttha rup)」と呼ばれるものである。「プラ(phra)」とは、タイで王、王族、神、仏などに使われる尊称であり、「プッタ(phuttha)」は日本語の仏陀と同様、サンスクリット語の buddha に由来する語、「ループ(rup)」は姿、形、絵画、像にあたる。仏陀の姿を絵画や彫刻等の造形物によって表現したものを指し、辞書的には日本語における「仏像」に対応するが、それぞれの言葉が指し示す範囲には若干の違いがある。

日本語の「仏陀」はサンスクリット語の Buddha の音写で、すなわち「真理、本質、実相を悟った人」を表し、「知れる人」、「目覚めた人」、「真理を悟った者」という意味がある。固有名詞ではなく、普通名詞であり、仏教の開祖といわれるゴータマ・シッダールタは、そのうちのひとりとされる[中村 1994:211-213]。広義の「仏像」には、そのゴータマ・シッダールタが悟りを開いた後の姿を様々な相位で表す如来像だけではなく、一切衆生を救おうとする姿として、悟りを開く前のゴータマ・シッダールタを表した菩薩像のほか、仏教に取り入れられて護法神となったインド古代神話の神々である明王や天部の像、さらには仏陀の弟子たちを含む悟りを開いた高僧たちである阿羅漢、仏教の布教に尽力した人物や、仏教の隆盛を支えた高僧の姿をうつした祖師像も含まれている。

それに対し、タイ語の「プラプッタ・ループ」が示す範囲はそれよりも限定されており、日本語の釈迦牟尼像に対応するということもできる。タイにおいても仏教寺院内外でインド神話の神々の像や、高僧の像が祀られることは一般的で、仏教徒である人々の信仰対象となっている。帝釈天にあたるインドラ神や歓喜天にあたるガネーシャは特に信仰を集めているが、「テープ(thep)」や「テワダー(thewada)」という天使、天人、神々にあたる語彙が用いられ、「プラプッタ」すなわち「仏陀」とは呼ばれない[1)]。これは高僧についても同様であり、「プラ・アラハト(phra arahat)」、「ルアン・ポー(luang pho)」といった別の名で呼ばれる。タイ語の「プラプッタ」はあくまでゴータマ・シッダールタそのひとを指し、「プラプッタ・ループ」はその姿を表現した図像や彫刻を示しているといえる。本稿においては、タイ語の「プラプッタ・ループ」に相当するものとして「仏像」という言葉を用いることとする。

この違いは、上座仏教と大乗仏教の特徴として説明することも可能であろう。前者がゴータマ・シッダールタの教えを拠り所とし、出家して自らの力によってのみ悟りを開く事ができるという自力救済を説くのに対し、後

者は、仏陀や菩薩が現世で苦しみ悩んでいるすべての者を救済し、悟りへと導くという衆生済度を説いている。大乗仏教では広く民衆のための仏教であることを目指し、みずからは救われなくてもまず他人を救うという利他行に焦点が当てられる。その結果、悟りを得ることを目指しながらも、人々の救済を求める修行者の姿である菩薩像をはじめ、諸仏への信仰を強調するために多数の仏像が製作されてきた[澤村 2009:57]。

しかし、現在タイにおいて人々に信仰される仏像の特徴は、仏教の分類によってのみ解釈できるものではない。今日新たに造像されている仏像の多くは、国王や政治家といった権力者や仏教の経典を熟知した出家者のみの意思によって造仏されるのではなく、一般民衆の欲求によってつくられている。寺院の住職等、出家者の発案によって仏像が製造される例もあるが、製作の工程には在家の職人がかかわり、費用は地域住民をはじめとした在家者が功徳を積むための行為として寄進することで賄われる。歴史的な仏像についても、参拝者のたえない仏像がなぜ信仰を集めるに至ったかという理由を探れば、その多くは現世利益にまつわる世俗的な伝承にあり、教理に基づくものではない。仏典のみでは解釈できない、タイ人一般の生活世界に即した、いわば民衆の仏教表現が仏像にはあらわれるのである。

3. ウルトラマンブッタ騒動

3-1 騒動の起こり

問題となった絵画は、タイ東北部ナコーンラーチャシーマー(コーラート)県にある公立四年制大学の教育学部、芸術教育コースに在籍する女性が描いたものだ。仏像とテレビ番組のキャラクターがかけ合わされたようにみえる人物が描かれており、首から上は仏像のそれであるが、首から下は日本の特撮テレビ番組に登場する巨大ヒーローのウルトラマンにみえる姿が描かれている。展示されたのは、四枚の連作のうちの二枚であるとされている。一枚は、結跏趺坐に降魔印をむすび、顔は卵型の輪郭、頭部には肉髻の上にラッサミーと呼ばれる光明を表す火焔形の装飾がほどこされた仏像のような姿が描かれている(画像1)。しかし、一般的な仏像はサンカティと呼ばれる肩掛け布をまとった姿であるのに対し、この像は、胴と腕脚には赤色の特徴的な意匠により、ウルトラセブン風のコスチュームを身に着けているようにみえる。もう一枚の画は、七人の人物が描かれており、頭部は黄金色でそれぞれ少しずつ様式の異なる仏像のものに見え、首から下はそれぞれのコスチュームとポーズにより、七体のウルトラヒーローが表現されている(画像2)。いずれの画も背景には、フランスのファッションブランド、ルイ・ヴィトンの象徴とされるモノグラムと呼ばれるパターンが描かれていた。

2019 年 9 月 3 日から 11 日の予定で開催された展示会[Thapanee.buddhiststudies 2019/09/03 online]に出展されたものだったが、人びとの目を引いた絵画は SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)によってインターネット上で拡散され、大きな物議をよぶこととなった。絵画の芸術性を評価する投稿もあったが、仏教を冒涜するものだとの批判があがり、炎上騒ぎに発展したのである。展示されていた画はすぐに撤去され、はじめて展示された日からわずか四日後には作者の学生は県知事と学長に付き添われ地元の高僧のもとを訪ねている[INN NEWS 2019/09/07:online]。学生は涙ながらに「悪から人類を守り世界に平和をもたらすスーパーヒーローに仏陀をなぞらえて制作した」「決して悪意はなかった」と釈明し、高僧の前にひれ伏して、自身の浅はかな行いについてすべての人への深い謝意を示した。高僧もそれを受け入れ、「学生に侮辱の意図はなかった。寛容な精神で互いに許しを」と人びとによびかけた[WORKPOINT NEWS

画像1　出典: Prasit Tangprasert 2019/09/13 Bangkok Post “Second Ultraman Buddha painting Sells for B2m”＜https://www.bangkokpost.com/thailand/general/1749264/second-ultraman-buddha-painting-sells-for-b2m＞

画像2　出典: Prasit Tangprasert 2019/09/10 Bangkok Post “Ultraman Buddha’ paintings banned from sale”＜https://www.bangkokpost.com/thailand/general/1746959/ultraman-buddha-paintings-banned-from-sale＞

2019/09/07　online]。ところが、それでも騒動は沈静化することなく、一部からの批判はその後も続いた。学生を擁護する著名な芸術家のチャルムチャイ氏（Chalermchai Kositpipat）が自身の Facebook ページに「新しい世代が自由な発想や創造性を示す力を萎縮させるべきではない」と訴える動画を投稿したのをはじめ、学生への批判に対する行き過ぎをたしなめる声もあげられたが、ついには強硬派といわれる仏教団体が

作者と展示の関係者、さらに作品を擁護した芸術家までを相手取って、宗教を侮辱した罪での訴追を警察に求めるまでに発展する騒ぎとなった[2)][Thailat 2019/09/11 online][NationTV 2019/09/16 online]

タイでは様々な分野で ICT が盛んに活用されており、インターネット利用者の 90%以上が SNS を利用しているという調査結果もある。地元の話題で終わってもおかしくはなかった作品が、インターネットを介して多くの人の目に触れたことにより、関係者の思わぬ問題に発展し、テレビや新聞にも報じされタイ全土に知れわたったことになる。インターネット上での誹謗中傷をめぐる問題は、世界的にも近年認知を高めつつあり、議論されるべき課題となっている。作品とそれをめぐる顛末は"Ultraman Buddha"と名付けられ、国際ニュースにも取り上げられた。

3-2 タイにおける仏像の厳格な側面

仏像の起源は、インド西北、ガンダーラ地方においてギリシャ人のヘレニズム文化とインドの伝統とが混淆して造像がはじまったものであるといわれている。古代インドでは像を造る習慣はなく、偶像化は禁忌となっていたため、法輪や仏足石が印として祀られてきた。上座仏教において依るべきなのはゴータマ・シッダールタの教えであり、法輪、仏足石、仏像はいずれもその象徴にすぎない。しかし在家者にとっては、仏像への参拝や造像は功徳行為だと考えられ、直接的な信仰の対象になっていることも事実である。

タイにおいて仏像は神聖な存在として扱われる。仏像には足を向けてはならない、本尊のある寺院の本堂に入る際には露出を控えた服装をするなど、仏像にまつわるタブーもある。どんなに小さな仏像であっても敬意を払う対象であり、タイの人々は仏像が描かれた御守をみだりに尻のポケットに入れたり、仏像の写真が入った絵葉書を床に落としたままには決してしない。

同じ仏教国とはいえ、日本における一般的な感覚とも異なっている。日本人も仏像を軽んじてはいないが、歴史的にも創造性に富んだ仏像が造像されているほか、今日では仏像や歴史上の人物としてのゴータマ・シッダールタが玩具や雑貨のモチーフになったり、キャラクター化される例もある。時には宗教的な象徴物にたいする軽率な扱いを問題視する声があがることもあるが、明確な規制を設ける機関はなく、個人の道徳心にゆだねられているといえる。

日本の観光地では大仏をかたどった雑貨やお菓子がお土産品として売られていることがあるが、これに抵抗を感じるひとは少ない。一方、タイでは 2021 年 4 月、タイ菓子屋が仏像を模った菓子の販売をはじめたところ話題となり、ある層には好評を博し入荷待ちの人気商品となったが、そのことがメディアに取り上げられると、やはり別の層からは宗教的に問題があるという批判にさらされるということがおこっている[Prachachat 2021/04/28 online]。食されるか古くなって廃棄されうるものであるお菓子は信仰の対象となり得ない、さらに営利目的のために販売されるのは不適切であるとの指摘がされた。仏像はあくまで信仰の対象となるべきもので、雑貨や食品、商業に用いられてはならないという価値観がある。

タイの仏教芸術は、建築物の精巧な装飾や美しい壁画で、仏教に帰依していない外国人観光客をも魅了しているが、仏像は頭部や手などその一部であっても美術品として国外に持ち出すことは法によって禁止されている[3)]。非仏教徒に対しても仏像に敬意を払うことが強く求められているのである。

3－3 タイにおける仏教寺院の包容性

宗教的な背景を考えると、仏像は安易にアレンジして描けるテーマではなかったということもできるだろう。しかし、一方で仏教芸術が非仏教的要素やポップカルチャーをも取り込むことについては寛容的なことにも注意が必要である。

タイには立体像や壁画で地獄の世界を表現した寺院が数多くあり、日本では「地獄寺」と称される[4)]。これらは子どもなどにわかりやすく日頃の行いを戒めるためのものといわれるが、こうしたおどろおどろしい地獄画のなかに、場違いなキャラクターが紛れ込んでいることがある。教育的目的とはいえ怖いだけでは子どもは来ないという配慮や、絵師の遊び心で描きそえられたものともいわれるが、ひとたび SNS などで話題になるとそれを目当てにした参拝者がやってくるので、写真映えや話題性をねらってキャラクターを増やしてしまう寺院もあるという。

「ワット・ロンクン（Wat Rong Khun）」というチェンライ県の寺院がよく知られた例である。（絵画をめぐる騒動の際に学生の擁護をした芸術家でもある）チャルムチャイ氏が、1997 年に私財を投じて建築を開始した寺院で、常に増改築中とされている。伝統的な仏教建築に斬新な芸術を組み合わせた奇怪なデザインであり、地獄を表現する屋外の奇妙な造形物や、皮肉が込められた黄金色のトイレも特徴的であるが、本堂の壁画にアニメや映画のキャラクターなどが数多く描きこまれていることで知られる。地獄画のなかにドラえもん、スパイダーマン、マイケル・ジャクソンなど、大衆的なアイコンが描き込まれ、さらに描き足され、アップデートされていく。

ワット・ロンクンは「ワット」つまりタイ語で「寺院」と称されているが、地元では正当な仏教寺院というより観光施設と認識しているひともいる。しかし、この寺院がラーマ 9 世王に捧げられ、生前にその国王自身が幾度も参拝、さらに 2011 年にはチャルムチャイ氏が国家芸術家の称号を受けるなど、高い評価を受ける寺院であり、ワット・ロンクンの壁画が仏教を冒涜しているとの訴えを受けるということはない。ワット・ロンクンの本堂に祀られる本尊は、アユタヤ様式、スコータイ様式等、いずれの時代の様式にもとらわれないデザインであるとされるが、その姿勢は結跏趺坐の正統派ともいえる仏像である（画像3）。本堂の外観や壁画にみられるような奇抜さは仏像にはなく、人々に受け入れられる落ち着いた型のものだ。現在安置されている仏像は、ラーマ 9 世王崩御後に、亡き王に捧げるために公開されたチャルムチャイ氏の作品であり、報道では「芸術的で美しい」仏像だとされている[5)][KomChadLuek 2016/10/19 online]

そのほかの寺院でも、広く一般のタイの仏教寺院境内において、仏像以外の、非仏教的な立体像が配されていることがしばしばある。仏教はもともとその成立以前から当時民衆の間でおこなわれていた神々への信仰を否定していない。仏教に天地創造の唯一神は存在しないが、人間よりもすぐれたものとして多数の神々の存在が認められており、天、地、樹木、天体のなかにも多数の神々が宿っていることを想定している［中村 1994：614］。そのため、タイの仏教寺院の境内の樹木に「三色布（パーサムスィー）」が巻かれ「精霊が宿る木」として祀られていたり、土地の守護精霊の祠が建てられていたりということもある。プラーナ神話の神々をも承認しつつも、ゴータマ・シッダールタの説き明かした心理は神々の権威を超えたものであるとの考えから、その神々も仏教に帰依したものとされる。寺院の境内では、仏教の守護神となった神々が装飾にもちいられたり、その像が安置されていることも多い。また、そのほかにも干支をあらわした像や、アニメキャラクターの像まで鎮座していることも珍しくはなく、タイの仏教寺院は神聖な場所であると同時に包容力もある空間となっている。

画像3 ワット・ロンクンの本尊
出典:KomChadLuek 2016/10/19 "*a.chalermchai sang phraphuttharup sinlapa phracam rachakanthi9*"＜https://www.komchadluek.net/news/246448＞

3－4 その後

ウルトラブッタの画も、すべてのひとが否定的に受けとったわけではなく、ひとつの表現として評価する声もあった。学生の展示会の画が全国的に話題となったきっかけは SNS での拡散だが、その画を気に入ったためにSNS にシェアした人もいたことだろう。展示されなかった 2 枚も含めた 4 枚の連作はすべて、展示会が中止された後に学生を擁護する人に買い取られることになった。さらに、そのうちの 2 枚は買い取ったひとによってチャリティオークションにかけられ、高値で落札されている［Soonthorn, Prasit and Wassayos 2019/09/11 online］。収益の一部は絵画の作者である学生に学費として還元され、残りの資金はすべて学生の地元の病院に寄付されたという。オークションを主催した男性の Facebook ページでは、病院側からの要望で購入した医療機器を学生と共に届けたとして、集中治療室で撮影した写真が公開された。

本来仏像は売買されるべきではないという原則があることにも注意が必要である。実際には金銭による取引がされているが、一般的には仏像のやり取りは「売買」に相当する「スー・カイ（su・khai）」ではなく、「貸借」にあたる「ハイチャオ・チャオ（hai chao・chao）」という動詞が使われている。

慈善活動は仏教における積徳行為のひとつである。僧侶に布施をしたり、仏塔を建てるのと同様、自身に善き行いとして還ってくるとされる、正しく、道徳的な行為である。その意味では絵画を批判する声への反発として、これ以上のやり方はなかったかもしれない。オークションの落札者にまつわる情報はでておらず、破壊を目的にした購入なのか、美術的価値を認めて絵画の入手を望んだのか、学生への支持の表明のために入札したのか、その意図はわからない。しかし作品の受け取られ方がどのようなものだったかにせよ、最終的にその画は必要なところへ恩恵をもたらした。さらにいえば、画や作者に対する批判の声、絵画は破壊されるべきだという主張も、話題性を高めてオークションの入札額をひきあげるのに結果的に一役買っていたことになる。「現代芸術が仏像をアレンジして描くことは批判されるが、仏教美術がポップカルチャーをとりいれることは容認されている」とみれば、論争となった絵画は仏教的文脈での善行のなかに組み込まれることで一応の終着地を見いだしたといえる。

2019 年 9 月 9 日、学生は Facebook ページを開設している。最初の投稿で、「チャルムチャイ先生やアーティストのみなさんをはじめとし、励ましてくれたすべてのみなさんに感謝申し上げます。そして、コーラート知事、宗教省、学長、多くの方にご迷惑をおかけしたことを謝罪いたします」と、謝罪と感謝をしめし、「みなさんからのアドバイスをうけ、今後もまた創作活動を発展させていきたいと思います」としている[facebook より]。言葉の通り、この最初の投稿には 6 枚の自身の作品の画像が販売価格とともに添付された。その後も、この Facebook ページで自身の作品の発表や展覧会の告知をおこなっているほか、「友人の学費を支援してください」というコメントをつけ、友人の作品も紹介している。2019 年 11 月現在、このページには 5790 人のフォロワーがついている。

また、2020 年 8 月には、問題になった作品とよく似た作風の画像が投稿されている。大学での展示会の模様として投稿された写真には、数枚の大型の作品が写されており、そのうちの 4 枚はやはりウルトラヒーローに似た装飾を身に着け、光線を放つ人物群が描かれているのが確認できる。頭部を仏像ではなく、古代文明をおもわせる仮面風のものに置き換えたような作品も小さく映り込んでいるが(画像 4)、鮮明な写真が公開されている絵画に描かれているのは、肌は金色や銀色ではなく薄橙色で、顔は仏像風ではない人物群である(画像 5)。このうちの1枚は、インド神話に由来する蛇神ナーガも人物とともに描かれているが、オンラインで観察される限り、これらの作品は批判されることも、広く拡散されることもなかった。

(画像4)左 (画像5)右
出典:Facebook<https://www.facebook.com/photo?fbid=2567436163586781&set=pcb.2567443233586074>より 人物のぼかし筆者加工

2020 年 9 月ごろから、タイでは若者たちを中心に、反政府運動やデモ行進が本格的に行われるようになった。軍事政権となっている現政権の退陣、民主主義に則った新憲法制定、また王室制度の改革に向けた議論などを求める運動である。この運動のなかで、創造性にあふれた芸術的活動が活発化し、表現の自由にまつわる議論や芸術の役割を問う風潮がうまれてきている。公共の場で神出鬼没のパフォーマンスが行われるモブや、インターネット・ミームの製作・拡散など、さまざまな趣向の芸術活動が、中高生を含む一般市民によって展開されるなか、プロのアーティストたちや芸術業界のなかでも、社会、政治問題と芸術表現の立場が改めて課題として認識される契機にもなっているといわれる[6)]。

タイはインドから伝わった上座仏教とともに、スリランカから王権思想を受け入れている。国王は神々の化身とみなされるなど、タイにおいて宗教は王権に神聖性や正当性を与えるものとしても機能しており、完全な政教分離はなされていない。仏像がクリエイティブな作品として扱われることをめぐる問題は、民主主義の議論ともかかわってくるだろう。作品が公開された時期が数ヶ月遅かったら、絵画をめぐる議論は全く別のものになっていたかもしれない。

仏像というモチーフ、あるいはそれを支える社会的な仏教に対する理解や価値観は、揺るがし難いものであるがゆえに慎重に扱わなければならないのではなく、むしろ揺るぎやすく、民衆の解釈によって容易に姿を変えうるものであるからこそ、繊細な問題として立ち現れることがある。しかし、現在の世俗世界を生きる人々によって実践されていく仏教は、時代の流れにともない姿を変えていくことは当然といえる。しなやかさがあるからこそ、当時代の人々に寄り添い続けることができるのである。次章では、COVID-19の世界的大流行という大きな社会、生活の変化のなかで生じた、ある姿勢の仏像をめぐる諸相を考察する。

4 「病比丘介抱姿勢仏陀像」をめぐって

4－1 パンデミックのもとでの注目

COVID-19の世界的なパンデミックのもとで、タイではある珍しい姿の仏像に注目があつまっている。「プラプッタ・ループ・パーン・パヤバーン(phra phuttha rup pang phayabang)」と呼ばれるもので、日本語に訳すならば「病比丘介抱姿勢仏陀像」という意味になり、その名前の通り、仏陀が病に伏した修行者を抱きかかえ、看病している姿が表現されている。2020 年 3 月に、SNS 上で画像がシェアされたのをきっかけに、マスメディアでも実在の立像の所在などがとりあげられるようになった[ex.Thanaphat 2020/04/13 online; Kowit 2020/05/06 online:2172336.html]。

この像は、仏陀が病臥していてだれも近づかないような修行僧を介護したという以下の逸話をモチーフにしたものとされる。

昔、如来が在世された時、病気の修行僧が苦しみながら唯一住んでいた。世尊が目にされて、
「汝はどうして苦しんでいるのか、どうして一人で居るのか」
と問われると、
「私は生まれつき怠け者で、(他人を)看病するに耐えられませんでした。それで今、病気にかかっても看病してくれる人がありません」
と答えた。如来はこの時、哀れに思われて、
「善男子よ。わたくしが今、汝を看よう」
と告げられ、手で擦ると病苦はすっかり癒えた。戸外に手助けして連れ出し、敷布団を取り替え、如来がみずから体をあらってやり、新しい衣に着替えさせた。仏は修行僧に、
「自ら勤め励みなさい」と話された。この教えを聞き恩に感じ、心も身も喜びに溢れた」
[中村 1993:29－33][玄奘 1971:189]

その手によって病苦を癒やしたという伝承[7]から、疫病退散、健康祈願、さらにパンデミックの収束に対する御利益の期待から関心が集まり、次々と全国各地に現存する同じモチーフ像が確認されている。筆者がインターネット上で調べた限りでは、12 尊の現存する像の画像が確認できた(表1)。また、別に 2020 年 4 月現在、新たな像が塑造中であるとの報道も確認できる[Thailat 2020/04/17 online]

表 1 タイ国内の病比丘介抱姿勢仏陀像

	寺院	県	備考
1	ワット・カノーンヌア	アユタヤ	1960 年代造像
2	ワット・スッタラターム	バンコク	スッタラターム病院に隣接
3	ワット・クラトゥム・スアプラー	バンコク	80 尊の仏像が安置された仏像博物館のうちの 1 尊
4	ワット・ナムリット ヌア	ウタラディット	1971 年造像
5	ワット・サパーンヒン	トラート	
6	ワット・ワングマナーオ	ラチャブリー	
7	ワット・クローク ケーオ ウォン プラチャン	チャチューンサオ	仏陀の生涯を表す色彩立体像のうちのひとつ
8	マハーサーラカーム大学	マハーサーラカーム	2014 年 12月造像
9	カオウォンコット健康増進活動拠点病院	チャンタブリー	ジーヴァカの像と併設
10	ワット・バーンケーング	ナコーンサワン	
11	チッタパーワン専門学校	チョンブリー	
12	ワット・セーナーサナラム・ラチャウォラウィハン	アユタヤ	立像

最初に話題になった画像の像は、アユタヤ県にある寺院ワット・カノーンヌア(Wat Khanon Nuea)に現存する高さ 2 メートルほどの漆喰製の像(画像6)で、50 年以上前に当時の住職の依頼を受けた地元の職人によって造像されたものであることが報じされた。現住職は、この像が人々の病いの治癒を願って作られたものであることを説明している[One31 2020/03/20 online]。

また、ワット・カノーンヌアでは過去にこの病比丘介抱姿勢仏陀像をモチーフとしたプラ・クルアンを発行していることも報道されている(画像7)[M2F 2020/03/19 online]。プラ・クルアンとは、金属、漆喰、粘土、貝の粉を固めたものなど様々な素材で作られた小仏像で、ペンダントにして身につけたり、家や自動車に置くなどして魔除けや厄除け、商売繁盛等の心願成就のご利益を願う護符である。年配者が身につけている印象が強いが、子どもや若者も服の内側等、人目に触れない場所にひっそりと身につけていたり、近年では天然石やビーズと組み合わせたファッション性の高いアイテムとしても展開されており、多くのタイ人が信仰の対象としている。

日本の寺院で発行されているお守りと異なり、来歴とともに価値を高めていくもので、骨董品と同様にコレク

画像6 ワット・カノーンヌアの病比丘介抱仏陀像
出典：One31 2020/03/20 "*huha! Phraphuttharup pangphayabang chuea su khowit19*"
<https://www.one31.net/news/detail/19674>

ターや目利きも存在している。露天商や専門の市場で取引されているが、非常事態宣言発令以降、多くの市場は規模を縮小、なかには完全に閉鎖してしまった市場もある。入手が困難になっているなかで、パンデミックにともなう様々な不安から、特に健康祈願への効果に期待が高いものを手に入れたと思うひとが増加しているともいわれ、関心が高まっているものでもある[cf.Suwannarat 2021/11/09 online]。ワット・カノーンヌアの病比丘介抱姿勢仏陀像のプラ・クルアンは、2009 年と 2010 年の二年にわたって発行されたもので銀製、金属製の二種類があるという[M2F 2020/03/19 online]。

画像7 プラ・クルアン
出典: M2F 2020/03/19 "*maalaew! phrapangphayaban sang kwancamlangcai su khowit19*" <https://www.m2fnews.com/news/thainews/around-thailand/55270>

4－2 特徴的な姿勢

タイでは時代や地域によっても、さまざまな様式の仏像がつくられ、各地の寺院や博物館などに保存、信仰されている。現在「プラプッタ・ループ」すなわち「仏像」として造像されるものは、パーリ仏典に基づき、実在の人物ゴータマ・シッダールタの歴史に即した姿勢でなければならないとされている［*Kromsinlapakon Krasuangwatthanatham* 2015:6］。釈迦入滅の姿を現した涅槃仏、悟りを開いた釈迦が人々に教えを広めようと歩みだした姿である遊行仏など、臥像や立像も知られるが、坐像が最も多い。特に、菩提樹の下で悟りを開く寸前に現れた魔物を、大地の力をかりて打倒した時の印相とされる触地印（降魔印）が好まれている［cf.伊東 2002:172］。

片膝をついた仏像、特に別の僧侶を抱えている坐相は異色にも見える。正確な製造年を確認することはできなかったが、ワット・カノーンヌアの仏像が 50 年ほど前に漆喰で作られたとされるのをはじめ、他の病比丘介抱姿勢仏陀像も制作した職人の存命が確認されている例も多く、また材質も写真で見る限り耐久性の高い金属や石材ではなく、漆喰や粘土で作られたように見える物が主であることから、多くは比較的新しい時代に塑像されたものだとみられる。

病比丘介抱姿勢仏陀像とされる仏像は、いずれも病比丘を抱えあげているというだけでなく、右の膝を立て、左手で比丘の手を下から支えている姿勢など細かい点でも共通する。頭髪はタイで好まれる螺髪にラッサミーというものではなく、ガンダーラ仏にみられるような波状をなし頭頂で束ねられた肉髻が多くの病比丘介抱仏陀像に共通して使わる表現となっている。また、特徴的な姿勢については、キリスト教における「ピエタ」像との類似も指摘されている［Thanaphat 2020/04/13 online］。

国内で最古の病比丘介抱姿勢仏陀像がいつどこでつくられたのか不明であるが、最初の像がつくられた後、他の像は既存の像を模倣しながらつくられていった可能性も考えられる。アユタヤ県の寺院、ワット・カノーンヌアの仏像を手掛けた職人は、依頼した当時の住持が持参した写真を見ながら造形したと述べているほか［Sanook 2019/06/12 online］、ウタラディット県のワット・ナムリットヌアの仏像は、チョンブリー県のチッタパーワン仏教専門学校の病比丘介抱姿勢仏陀像を見たことが造像の経緯として語られている［Kapook 2014/12/08 online］

4－3 パンデミック以前の反応

新型コロナウイルスのパンデミックのもので信仰を集めるようになった病比丘介抱姿勢仏陀像であるが、実はそれ以前には人々から不評、悪評をかうこともあった。

タイ最大といわれるポータルサイト Sanook.com は、2009 年 6 月に掲載した記事で、アユタヤ県の寺院ワット・カノーンヌアに安置された病比丘介抱姿勢仏陀像（画像6）について取り上げているが、当時は「一般的な仏像とは異なる奇妙な見た目から、訪れる人々を当惑させている仏像」として扱っている［Sanook 2019/06/25 online］。

記事では、タイ国サンガ最高評議会（The Sangha Supreme Council of Thailand:SSC）の見解として「この仏像は病比丘を看病したという仏陀の歴史にまつわるものであり、決して醜いものではない。地元住民からの信仰もあり、問題はない」と報じる一方、「珍しい形の仏像を作製する際には、事前にサンガ最高評議

会に許可を求める必要がある。不適切な仏像が確認された場合は、各地域のサンガ評議員が警告等の対応をすることになる」とのコメントも紹介している。さらに、国家仏教事務局（National Office of Buddhism:NOB）に所属する専門家の言葉として、上座仏教では、ゴータマ・シッダールタの生涯にまつわる姿勢のみが「仏像」として描かれるが、大乗仏教圏での「仏像」にはさらに多様性がある可能性にも触れたうえで、「過去にも奇抜な姿勢の仏像が作製されたことはあり、美しく仕上がった例もあれば、不適切で見たひとを不安に感じさせるものある。既存の仏像が、見たひとを不快にさせるという訴えがあった場合、所有する寺院等の責任者は布で覆うなどして適切に管理する必要がある」との内容でむすんでおり、仏像の病気平癒祈願への期待に焦点はあてられていない。

別の例では、2016 年 8 月にチャンタブリー県のカオウォンコット（Khao Wongkot）健康増進活動拠点病院の前にすえられた病比丘介抱姿勢仏陀像（画像 8）が、見たひとから「気味が悪い」、さらには「性的な愛撫のように見える」など、仏像の姿として不適切だとの声があがり、宗教局に対応を求める訴えを起こしたという事例もある。Sanook と同系列のポータルサイト Kapook［2016/08/16 online］などで報じられた。

画像8　カオウォンコット（Khao Wongkot）健康増進活動拠点病院の前の病比丘介抱姿勢仏陀像とジーヴァカの像　出典：Kapook 2016/08/16 “*thoksanan rongpayaban yan canthaburi sang phraphuttharup nuntak mo ru mai*” <https://hilight.kapook.com/view/140933>

この仏像は、ゴータマ・シッダールタと病比丘のほか、もうひとりの人物像があわせて安置されていることが特徴であるが、これは古代インドのマガダ国・ラージャグリハの医者、ジーヴァカの像であり、いずれの像も病院の依頼によって造像されたものであることが明らかになっている。ワット・カノーンヌアの仏像の際と同様、いかがわしいものではなく、パーリ経典に則った正当な姿勢であることが報道でも解説され、また地元の住民からは信仰を集めていることも伝えられた［Sanook 2016/08/16 online］。建設のために 50000 バーツの寄進が集まり、四ヶ月の期間をかけて造像された後は、病院で働く医療従事者や、治療に訪れる患者をはじめ、村民から参拝されている仏像であることを報じ、他所から来て偶然目にした者が自身の価値観で見慣れない仏像を評価してしまうことを諌めるような記事もある［MGR Online 2016/08/18 online］。

いずれの例も、問題としてとりあげられたきっかけは観光客等、近隣住民以外からの指摘であり、最終的には、知名度は低いが経典に基づく正当な姿勢であるということ、すでに地元からの支持や信仰を得ていること

の二点を根拠に、問題は終息している。

住民からの信仰という点では、ウタラディット県のワット・ナムリットヌアに安置されている病比丘介抱姿勢仏陀像も興味深い事例である。

画像9　ワット・ナムリットヌアの病比丘介抱姿勢仏陀像
出典：TAT Contact center 2015/06/04 “*lap..laemailopleuan chuanmaayeuan meuangutradit*” ＜https://archived.tatcontactcenter.com/th/รายละเอียดบทความ/266＞

ウタラディット県のワット・ナムリットヌアの仏像（画像9）は、地元で病の回復を願う人々から信仰を集めている。この仏像は 1971 年頃、当時この寺院で出家していた村民のひとりが、自身の手足の麻痺の回復を願って仏像の姿勢を研究し、自ら塑造したものである[KomChadLuek 2014/12/08 online]。作成した人物は現在でも村に住んでおり、当時五ヶ月をかけ仏像を完成し、金色の塗装が仕上がった時には手足の麻痺は完治し、健康なひとと同じように歩くことができるようになったと語っている[Thailat 2015/05/13 online]。以来、この仏像には、自身や近親者の病の回復を願う人々が参拝し、病いが癒やされた際のお礼参りには三、五もしくは九ニウ（niw）[8]の大きさの、自身の産まれた曜日の守護仏[9]もしくは黄衣を寄進するのがならいになっているという[KomChadLuek 2014/12/08 online]。

また、ワット・ナムリットヌアの病比丘介抱姿勢仏像に拝礼したのちに病が治ったというひとの話のほかにも、次のような逸話がある。当初、寺院内で造像した後はウタラディット病院に安置されるはずであった。しかし完成後に運びだそうとしたところ、不思議なことにどうしても持ち上げることができなかった。そのため、その後今日に至っても寺院本堂に祀られ続けることになったというのである。

そのような伝承がこの仏像への神秘性を与え、また祈願が成就した人々によって仏像の前にささげられる供物が、さらに病気平癒のご利益へ期待を高めることにもつながっているともいえる。人々の信仰をあつめるこの仏像は、珍しい姿勢であるという点ではなく、人々から親しまれ、敬われている仏像として、ウタラディット県の観光案内にも掲載されている[TAT Contact center 2015/06/04 online]。仏像はあくまで信仰の対象となりうるかどうかが重視されている。

4－4 時代や社会によって変化する仏像の役割

地域や時代を問わず、ひとは強い情念、なんとしても叶えたい願望、欲望、あるいは乗り越え難い恐怖や不安があるとき、そして特に合理的解決手段が得られない時、多かれ少なかれ、超自然的存在の力に頼ろうとする[マリノフスキー 1997]。COVID-19 への研究が進む以前、ワクチンの開発研究はもちろん、予防法の有効性も確認されていなかった時点では、マスメディアや SNS では心の拠り所を求め様々な情報が飛び交っていた。世界中で感染対策拡大を避けるためにさまざまな祭事が中止されたり、縮小されているが、なかには、古くから無病息災や病気平癒を願う恒例行事とされてきたものも数多く含まれている。本来は人々の願いを受け止めるものになっていた各地の「まつり（祭り、祀り、奉り）」、他ならぬその祭式の実施こそが、人々の健康を脅かすものとなってしまったというのは皮肉でもある。

2020 年 3 月、タイで病比丘看病姿勢仏陀像やそのプラ・クルアンの認知度が上がっていったのと重なる時期に、日本においては、江戸時代後期の瓦版に登場したという妖怪の「アマビエ」が流行する現象が起こった。豊作や疫病などを予言したと伝えられ、「わたしの姿をうつして人々に見せよ」と言い残して姿を消したと記録があることから、アマビエの姿を描くことが除災になるという解釈がされ、SNS などでイラストをシェアする運動がおこった。アマビエをきっかけとし、その後全国で伝わっている類似した妖怪の伝承が掘り起こされたり、「疫病退散」という言葉も頻繁に使われるようになったが、江戸時代にコレラが流行した際、未知の病いへの不安へ対処するために人々が生み出した信仰が、未知の病いの流行という危機に際して、再び価値を見いだされた現象としても注目された[ex.朴 2021:122]。

ほかにも日常生活に大きな影響を及ぼしたパンデミックのなかで、世界ではさまざまな社会的取り組みが行われた。自宅待機中の子どもたちが虹の絵を描いて窓にかかげたり、決められた時刻に一斉に拍手をするといった活動は、物理的距離をあけたなかでも他者との社会的な繋がりを確認したり、励まし合ったりする行為でもあるが、有効な治療法、予防法が確立していない未知の感染病への恐怖に対処しようとする呪術的行為だともいえる。タイでは多くの人々が仏教に心の拠り所を求めた。大勢の人を集めての大規模な儀礼は一時少なくなり、僧侶も参拝者もマスクやフェイスシールドをつけ、互いに距離を取るなどの対策が厳守される時期もあったが、托鉢や布施をする姿はかわらない。

本来「出家者の仏教」は、自らの修行によってのみ救済が得られると説く。自分の思い通りにならないものへの執着を捨てるべく修行を積み、輪廻からの解脱をめざすのであるから、出家者はそもそも死や病いへの恐怖、COVID-19 を含めた世俗の問題からは身を離しているべきということになる。一方で、多くの一般の人々は在家の信徒として、輪廻転生や因果応報のなかでのより良い境遇を求め、功徳を積む。サンガへの布施や親孝行が積徳行為として知られるが、慈善事業への寄付やボランティア活動も功徳になるととらえられるため、社会的に不安が広がっている状況にこそ、相互扶助の精神が発揮されるという側面もある。非常事態宣言発令以来、急増してしまった生活困難者への支援や、チャリティ活動の輪が広がったことの所以ともいえる。

病比丘介抱姿勢仏陀像への参拝やそのプラ・クルアンを求める行為は、不安への対処であり、その不安は病や死を恐れる現世への執着に起因するものにほかならない。であれば、俗世の欲から抜け出すことを目指す仏教の教えとは矛盾することになる。しかし、「在家者の仏教」には世俗世界を生きる中で生じる日常生活の不安を解消、緩和することも求められている。現世で功徳を積むことにより、来世で救済を得られるというのが基

本的な考え方であるが、現世における「今、この時」に直面している問題に対しても応えるものでなくてはならない。在家者は、功徳の蓄積によって、自己の運命を現世においてさえもある程度変えることができると信じる[石井 1991:109]。叶えたい願いや、解消したい不安があるときも積徳をし、得られる善果によって自身の運命をより良いほうへ引き寄せようとするのである。

現世利益を求める時、人々が依る対象はさまざまだ。自然物に宿る精霊、祖霊、中国廟、ヒンドゥー教寺院、インド神話の神々の像などへの参詣も、仏教の範疇と理解され、功徳を積むものと考えられている。また、ヒンドゥー的民間儀礼を仏教的に改作したり、サンガの聖性を効験性の根源とすることにより、仏教寺院ないしは出家者が儀礼や呪物(お守り)[10]を在家者のために提供する機構も存在する[石井 1975:41-48]。起源7世紀ごろから作製されていたというプラ・クルアンも、当初はお守りとしての意味はなく、寺院に奉納されるものであったという[石高 2014:159]。人々の要請に応えるために変化を重ねてきた結果、仏教寺院での儀礼によって聖性を付与され、寺院から在家者に授けられるものになったのだろう。

病比丘介抱仏陀像への信仰をめぐる変遷も、個人の願いから、地域の住民の信仰、社会全体からの不安解消へと、仏像のはたす役割が社会の変化に応じて広がっていった様子と見られる。

5. おわりに

仏像は仏教への帰依を象徴するものであり、在家者の信仰実践の具体的対象物でもある。とりあげたふたつの事例は、いずれも仏像すなわちそれが象徴するタイ上座仏教が、個人や社会によって、柔軟に受け止められていることが現れたものである。第三章で扱った絵画の例は、仏教芸術の領域にも創造性や自由を見出した若者とそれを支持する人々がいた一方、あくまで仏教を厳格な領域ものであるべきと受け取る人々も存在したことにより、それぞれの認識の齟齬から生じた論争だったといえる。また、第四章で扱った病比丘介抱仏陀像の事例は COVID-19 の流行という、日常生活への大きな変化によって、仏像に対する社会からの評価、期待が変化していったものである。いずれも、現在のタイ社会の状況を如実に表している。

冒頭において筆者は、多くのタイの人々にとってのタイ上座仏教を、広義の仏教という枠組みのなかに、多様な宗教的要素が重層的に存在している状態であると述べた。タイ上座仏教を枠組みの中に描かれる一枚の絵として見た時、その絵はコンピューターの描画ソフトで作成した一枚の静止画に例えることができるのではないだろうか。すなわち、見る者にとってその静止画は「タイ上座仏教」にほかならないが、その静止画のプロジェクトは、レイヤーと呼ばれるセル状の画像が幾重にもかさなって構成されている。レイヤーにはそれぞれ異なる宗教的要素が描かれ、原始仏教的な要素だけではなく、精霊信仰的なもの、非仏教的な要素が描かれるレイヤーもある。そして、それぞれのレイヤーの前後、濃淡(透明度)は個人や社会、その時々の状況によって、自在に調整され、最適化されるものだととらえることができる。

それぞれの宗教実践は相補的関係にある。ここでいう相補的関係とは、主要なひとつをほかが補足、補助するという関係ではなく、いずれにも同等の重要性があり、相互に補い合い、それらが揃うことで全体が構成されるという関係である。一方をもう一方に対して高次か低次かに位置付けるというものではなく、いずれの実践も、各人が生活の各領域に適した思考と世界観を適宜、意識的、無意識的に選び取って実践している。いずれの実践の可視性が高くなるかは、個人や時々によって異なるが、その区別や強弱が明確に認識されることな

く、現代タイの人々の生活世界に存在している。静止画をみるとき、レイヤーの枚数や順番は意識されず、ただそれは完成した一枚の絵として見られるように、タイ上座仏教という絵は、今後も社会や個人に寄り添い、その時その場に応じたバランスで調整され信仰されていく。

付記

本稿におけるタイ語の表記は原則 Royal Thai General System of Transcription (RTGS)を参照しローマ字表記としたが、地名等固有名詞に一般的な表記法がある場合にはそちらを採用し、カナ表記において長母音短母音の区別をした。

謝辞

本研究は JSPS 特別研究員奨励費 17J40124 の助成を受けたものです。

注

1) 石井は仏教説話に取り込まれたプラーナ神話の神々は、「人間ブッダの大悟に色どりをそえる脇役として描かれているにすぎない」と述べている[石井 1991:15]
2) 芸術家だけでなく、法学者でタマサート大学副学長のパリンヤー教授(Prinya Thaewanarumitkul)が学生と大学に対し法的支援を申し出るなど[The Nation 2019/09/13 online]、擁護派の声にも幅広いものがあった。
3) ただし、仏教徒が信仰の対象とする場合や、文化交流または研究を目的とする場合は、タイ王国文化省芸術局の許可により例外が適応される。
4) タイの地獄寺、地獄絵図については [椋橋 2018]が詳しい
5) 問題の絵画を描いた大学生が女性であったのに対し、チャルムチャイ氏が男性であることも無関係ではないだろう。タイ上座仏教の宗教的立場には男女の相違がある。[cf. 林 1987]
6) タイの民主活動におけるアート表現については[清恵子 2021 年 2 月 online:10166940_1635.html]が詳しい。
7) 同様の趣旨の話は複数記録されており、それがなされたと記録される場所も異なることから、ゴータマ・シッダールタが病める仲間を看病するということは生涯のなかで複数回なされたことだと考えられている。[中村 1993:29－33]
8) タイの独自の単位で1ニウは約 2 センチ。
9) 「プラ・プラチャム・ワンクート(phra pracam wan kuut)」と呼ばれる、それぞれ異なる姿勢、印相によって曜日を象徴する9尊の仏像(水曜日は日中と夜の2体で表し、すべての曜日に応用できるとされる一尊が加えられている)。多くのタイ人は、誕生日と一緒に自身の産まれた曜日を把握しており、対応する仏像を自身の守護仏として参詣したり、お守りを身に着けたりする。
10) プラ・クルアンのほかにも、「サーイシン(sai sin)」と呼ばれる聖木綿糸、「ナームモン(nam mon)」と呼ばれる聖水、「パーヤン(pha yan)」と呼ばれる布製の護符などが、仏教寺院での儀礼にもちいられ、サンガの聖性によって霊験をもつものとされ、在家者のお守りとなっている。

参照文献

石井米雄 1975『上座部仏教の政治社会学』創文社

石井米雄 1991『タイ仏教入門』めこん

石高真吾 2014「プラ・クルアン」綾部真雄編『タイを知るための 72 章(第二版)』明石書店 pp159-160

伊東照司 2002「東南アジアの仏像」大法輪閣編集『図解・仏像の見分け方＜増補新装版＞』大法輪閣

小川絵美子 2014「タイにおける占星術 ： 寺院における占星術師の活動を事例として」『年報タイ研究 第 14 号』日本タイ学会 pp.63-79

片岡樹 2014「中国廟からみたタイ仏教論 ： 南タイ，プーケットの 事例を中心に」『アジア・アフリカ地域研究 14(1)』pp.1-42

椋橋彩香 2018『タイの地獄寺』青弓社

澤村忠保 2009『仏像の見方』誠文堂新光社

中村元 1993『原始仏教の社会思想 (中村元選集決定版 第 18 巻)』春秋社

中村元 1994『原始仏教の思想Ⅱ(中村元選集決定版 第 16 巻)』春秋社

玄奘 1971(2000)水谷真成(訳注)『大唐西域記中国古典文学体系 22』平凡社

林行夫 1987「タイ仏教における女性の宗教的位相についての一考察」『DD ニューズレター (34) 1987-02-09』京都大学東南アジア研究センター pp41-18

朴炳道 2021「「災害」としての近世日本の「疫病」と宗教的対処―疱瘡・麻疹・コレラからコロナまで―」『現代宗教 2021』国際宗教研究所 pp103－125

B.マリノフスキー 1997 宮武公夫、高橋巌根(訳)『呪術・科学・宗教・神話』人文書院

Tambiah, Stanley J. 1970 Buddhism and the Spirit Cults in North-East Thailand. Cambridge University Press,

Tambiah, Stanley 1976 World Conqueror and World Renouncer: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background. Cambridge University Press.

ウェブサイト

清恵子 2021/02/01【バンコク】革命と芸術：タイで中高生が巻き起こした旋風 artscape2021 年 02 月 01 日号 ＜https://artscape.jp/focus/10166940_1635.html＞(2021 年 4 月 10 日閲覧)

(英語)

Prasit Tangprasert 2019/09/10 Bangkok Post ‘Ultraman Buddha’ paintings banned from sale<https://www. bangkokpost. com/thailand/general/1746959/ultraman-buddha-paintings-banned-from-sale>(2021 年 11 月 20 日最終閲覧)

Prasit Tangprasert 2019/09/13 Bangkok Post“Second Ultraman Buddha painting sells for B2m” ＜https://www. bangkokpost. com/ thailand/ general/ 1749264/ second- ultraman-buddha-painting-sell-for -b2m>(2021 年 11 月 20 日最終閲覧)

Soonthorn Khongwarakhom,Prasit Tangprasert and Wassayos Ngamkham 2019/09/11 Bangkok Post “Ultraman Buddha painting up for auction”
<https://www.bangkokpost.com/thailand/general/1747709>(2021 年 11 月 20 日最終閲覧)

Steve Suwannarat 2021/09/11/Asian News“Bangkok, pandemic fails to stop amulet market”
<http://www.asianews. it/news-en/Bangkok,-pandemic-fails-to-stop-amulet- market-54035. html>(2021 年 11 月 20 日閲覧)

THE NATION 2019/09/13“Student broke no laws with Buddha-Ultraman paintings: law expert”
<https://www.nationthailand.com/in-focus/30376169>(2021 年 11 月 20 日最終閲覧)

(タイ語)

INN NEWS 2019/09/07 “*n.s.sao chaokhong phlongan phapwatphraphuttharup ultramaen khao krap khokmat hangnamta tonachaokhanachangwatkhorat*”
<https://www.innnews.co.th/regional-news/news_483637/ >(2019 年 9 月 10 日閲覧)

Kapook 2014/12/08 “*chaoban hae kho phon phraphayaban chuea bandan hai rok hai*”
<https://hilight.kapook.com/view/112553>(2021 年 11 月 20 日最終閲覧)

Kapook 2016/08/16 “*thoksanan rongphayaban yan chanthaburi sang phraphuttharup nuntak mo ru mai*” <https://hilight.kapook.com/view/140933>(2021 年 11 月 20 日最終閲覧)

KomChadLuek 2014/12/08 “*hae chom phraphuttharuppangphayabang phiksu aa phat*”
<https://www.komchadluek.net/amulet/197316>(2021 年 11 月 20 日閲覧)

KomChadLuek 2016/10/19 “*a.chalmchai sang phraphuttharup sinlapa pracam rachakanthi9*”
<https://www.komchadluek.net/news/246448>(2021 年 11 月 20 日閲覧)

Kowit Wongsunwat 2020/05/06 Matichon online “*phraphuthruppangphayaban*”
<https://www.matichon.co.th/columnists/news_2172336>(2020 年 6 月 2 日閲覧)

Kromsinlapakon Krasuangwatthanatham 2015 “*Phraphuttarup pan tangtang*”
<https://www.finearts.go.th/storage/contents/2020/07/file/O5Ng4jpONBGmwqJQIHnqKZu4rBcM0DR8BdC6u9Fz.pdf>

MGRonline 2016/08/18 “*huak chao phutsanwai yatokcai pangnuntak*”
<https://mgronline.com/live/detail/9590000082426>(2021 年 11 月 20 日最終閲覧)

M2F 2020/03/19 “*maalaew! phrapangphayaban sang kwancamlangcai su khowit19*”
<https://www.m2fnews.com/news/thainews/around-thailand/55270>(2021 年 11 月 20 日最終閲覧)

NationTV 2019/09/16 “*klumchao putpalong paendin tonfong a charumchai bomphap phraputtahup ulutreamean*” <https://www.nationtv.tv/news/378741388>(2019 年 11 月 20 日閲覧)

One31 2020/03/20 “*huha! phraphuttharuppangphayabang chuea su khowit-19*”
<https://www.one31.net/news/detail/19674>(2021 年 11 月 29 日最終閲覧)

Prachachat.net 2021/04/28 “*aalua phra khruang drama khanonwan sathuen cai chaophuttha?*” <https://www.prachachat.net/general/news-657747>(2021 年 11 月 29 日最終閲覧)

PPTV36 2019/09/08 “*a.charemchai hnun ns wat phraphuttarup ultraman chi ya nam naokuenpai hen tang mai phit*” <https://www.pptvhd36.com/news/ประเด็นร้อน/110064>(2021 年 11 月 29 日最終閲覧)

Sanook 2019/06/25 “*heu-ha!! phuttharuppangphileuk um phrapiksu puai*” <https://www.sanook.com/news/786331/>(2021 年 11 月 20 日最終閲覧)

Sanook 2016/08/16 “*phop phuttharupbang plaeknonnuntak c.cantabure*” <https://www.sanook.com/news/2049866/>(2021 年 11 月 20 日最終閲覧)

TAT Contact center 2015/06/04 “*lap..laemailopleuan chuanmaayeuan meuangutradit*” <https://archived.tatcontactcenter.com/th/รายละเอียดบทความ/266>(2021 年 11 月 20 日最終閲覧)

Thailat 2015/05/13 “*hae krap phrapangphayaban umphiksuaaphat cheuchuai raksarokraihaikhat*” <https://www.thairath.co.th/news/local/498550>(2021nen11 月 20 日最終閲覧)

Thailat 2019/09/11 “*klum phutthacaengcap ns.wat phraputhrup ultramaen a.chalermchai don duai*”<https://www.thairath.co.th/news/crime/1658200>(2021 年 11 月 20 日最終閲覧)

Thairat 2020/04/17 “*watdang sang phrapangphayaban tan khowit19*” <https://www.thairath.co.th/clip/413274>(2021 年 11 月 20 日最終閲覧)

Thanaphat Limhasanaikul 2020/04/13 The Cloud “*pangphayaban*” <https://readthecloud.co/buddha-statue-in-the-attitude-of-nursing/>(2020 年 6 月 2 日閲覧)

Thapanee.buddhiststudies 2019/09/03 “*kansaebaeng phlongansinlapa khong naksueksa laksutsinpasueksa mahawityalai ratphatnakhonratsima*” <http://thapanee.buddhiststudies-nrru.net/uncategorized/> (2019 年 9 月 10 日閲覧)

WORKPOINT NEWS 2019/09/07 “*n.s caokhong phap phraphuttharup ulutra krao khokama mai mi cetnaloplu*”<https://workpointnews.com/2019/09/07/art/>(2019 年 9 月 10 日閲覧)